

B.LEAGUEの誕生と展開

藤原 歩

キーワード：B.LEAGUE、JBA、FIBA、川淵三郎

1. 研究の動機

現在の日本のバスケットボール界は、渡邊雄太選手や八村塁選手といった日本人選手がNBA入りを果たしたり、日本代表が2019ワールドカップや東京オリンピック出場を決めたりと注目を集めつつある。しかし、日本のプロバスケットボールは、数十年の歴史を有するプロ野球やJリーグに比べまだまだ歴史が浅いと言える。日本のプロバスケットボールは2005年にbjリーグが誕生して以来、長らくリーグが2つ存在するという期間が続いたが、2016年にジャパンプロフェッショナルバスケットボールリーグ(B.LEAGUE)が誕生し、リーグが1つに統合された。そこで、なぜこの時代にB.LEAGUEという新たなプロリーグが誕生し、現在に至るまでどのように普及していったのかということに関心を抱いたことが本研究の動機である。

2. 研究の目的と意義

B.LEAGUEに着目し、その誕生と展開について解明することを目的とする。また、B.LEAGUEを通して、バスケットボールの統括組織の歴史を研究することで、バスケットボールに限らず、様々なプロスポーツリーグの今後の発展の一助となることを本研究の意義とする。

3. 先行研究の検討

B.LEAGUEに関する研究には、以下の2点があった。「国内プロバスケットボール「B.LEAGUE」におけるスタッツおよびアドバンスドスタッツが勝敗に及ぼす影響」(元安陽一、2018)、「統計的レーディング手法に基づくB.LEAGUEの制度設計に関する考察」(小中英嗣、2017)。元安(2018)の研究では、

B.LEAGUEにおける戦術面に関して明らかにしており、小中(2017)の研究では、B.LEAGUEの制度について明らかにしていた。B.LEAGUEに関する先行研究は数少なく、また、リーグの創設の背景や、変遷等について記述した研究が少ないことが分かった。

4. 研究の方法

B.LEAGUEが誕生した経緯と展開の仕方を明らかにすることを課題とし、以下の時期区分に従って、B.LEAGUEの誕生と展開の経緯を明らかにしていく。

(1) B.LEAGUE誕生まで

(2) 開幕時

(3) 開幕後

史料としては、雑誌・新聞等メディアの記事、B.LEAGUE関係者の書籍、JBAの議会の議事録などを扱う。しかし、研究対象が比較的近年であり、史料として形に残されているものが非常に少ない。その点に関しては、JBA公式ホームページ、B.LEAGUE公式HPの閲覧等により、情報を補うこととする。

5. 本論

5.1 B.LEAGUEの誕生に至るまでの背景

当時の日本バスケットボール界は、2005年にbjリーグが誕生して以来、長らくリーグが2つ存在する期間が続いた。それに関し、FIBAがJBAに対し指摘を行ってきたにも関わらず、JBA、NBL、bjリーグ三者の意見の合意には至れなかった原因として、NBLとbjリーグの運営方針の違いがあったことがわかった。一方は、大企業が母体の企業チーム。一方は、プロリーグ。企業の活動費で活動し、社内の部活動的な立場で活動しているチームのNBLと、バスケの普及と地域密着を掲げ、2005年から自分たち

で採算を立てて継続してきた bj リーグとでは、大きく運営の方針が違っていたことがわかる。そのような状況の中、JBA は FIBA から FIBA 加盟国協会としての権利の喪失と、FIBA および FIBA Asia の行事への参加禁止という制裁を受けた。ここでこの日本バスケットボール界の状況を大きく変えたのが川淵三郎であった。FIBA の主導するタスクフォースと呼ばれる作業チームが発足し、川淵はチェアマンに就任した。タスクフォースが中心となり、FIBA からの制裁の内容であった以下の 3 点、すなわち、1) JBA ガバナンスの確立・強化、2) 男女日本代表チームの強化と若年層の強化・育成、3) 国内トップリーグの 1 リーグ化、について約 4 か月余りで方向性をまとめ、制裁から約 9 か月で正式に解除された。

5.2 B.LEAGUE 開幕に向けてと開幕時の状況

新リーグの入会に伴い、東芝神奈川、トヨタ自動車東京をはじめとする企業 5 チームが、独立法人化という条件に難色を示すという状況もあったが、最終的に入会に至ったのは、川淵という名の知れた人物が直接企業のトップの人と交渉をしたことが大きな要因であったことがわかった。また、2015 年 4 月に新リーグの運営組織が設立されて以来、開幕する 2016 年 9 月までおよそ 1 年 5 か月という期間で、リーグの階層分けをはじめとする人事採用やスポンサー集めなどが行われた。これは、J リーグが 5 年の準備期間があったということと比べても非常に短い期間で行われたことがわかる。こうして、開幕を迎えた B.LEAGUE の開幕戦は、スポーツ界、バスケット界初という取り組みが数多く行われた。結果として、入場者数、グッズ売り上げ、メディアの反響、世間の盛り上がりどれをとっても大成功だったということがいえるだろう。

5.3 開幕後の展開

開幕してからの 3 シーズンは、入場者数、収益、SNS の反響ともに順調なスタートを切ったといえる。また、「デジタルマーケティング」

の推進と代表、リーグ、クラブの「権益の統合」という野球やサッカーなど日本プロスポーツ界において本質的課題といわれていた領域に対して事業戦略を掲げ取り組んできた。2019 年 7 月には、「BEYOND 2020—超えて未来へ—」というテーマで中長期計画を発表し、2020 年以降の日本バスケットボール界のさらなる発展を見据えて新たなビジョンの追加やリーグ構造の変革を発表した。今後、2026 年を目途に NBA が採用しているリーグ構造への移行やナショナルアリーナの建設を予定としている。

6. 結論

B.LEAGUE は日本バスケットボール界にとっても非常に大きな役割を果たした。長年、日本バスケットボール界の 1 番の問題点であった 2 リーグ併存問題を解決し、FIBA からの制裁を解除されたことはもちろん、代表チームの強化という観点から見ても、日本バスケットボール界に大きな追い風をもたらしたといえるだろう。また、日本のスポーツ界においても B.LEAGUE の意義は大きい。「デジタルマーケティング」の推進と、代表、リーグ、クラブの「権益の統合」という野球やサッカーなど日本プロスポーツ界において本質的課題といわれていた領域に対しても B.LEAGUE は率先して取り組みを行ってきた。他のスポーツ団体にはない、また課題と言われる領域に対してアプローチしてきた B.LEAGUE。今後新たに誕生するリーグにおいても時代の流れを読み取り、常に新しいことを取り入れることが不可欠であるといえる。

7. 今後の課題

B.LEAGUE は誕生してわずか 4 年余りとまだまだ歴史が浅いリーグであるといえる。2019 年には、中長期計画を発表し、2020 年以降のさらなる発展を見据えたチャレンジを行おうとしている。リーグが今後どのようにさらなる発展をしていくのか探っていくことを今後の課題としたい。

(指導教員 秋元忍)